
王子と王女

小林 昶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と王女

【Nコード】

N8893S

【作者名】

小林 劔

【あらすじ】

ある王子と王女の日常の1コマ。オチなどありません。

サブタイトルの「王子と王女と○○」の○○に入る言葉で、絡む人物や出来事がわかるようになっていきます。

王子と王女と国王様

ある国に、双子の王子様と王女様がありました。

王様が自慢する子供達の中でも、瓜二つではつと見全く区別の付かない双子の王子と王女は、近年、その成長が一番の楽しみだと周囲にニヤケた顔で語るほどでした。

けれどもこの双子、誰にも言えないが、王様にとって悩みの種でもあったのです。

「テア？」

「ここ」

声は、開け放たれた窓の外から聞こえた。

「外？ 大変なんだけど」

隣接する内庭へと足を踏み入れつつ、ぐるりと周囲を見回す。

「テオの大変は、あまり当てにならないけれど？」

結構な額のする筈のドレスを着ているのに気にする素振りもなく庭の芝生の上に腰を下ろして、膝の上に乗せた本から視線を外す事なく返事が返る。

「そんな所に座って、また怒られるよ？」

「だったら、椅子の一つくらい置けばいい」

「テア。それで、大変なんだけどね」

「うん？」

どう見ても、話半分にししか聞いていないその姿に、溜息を一つ。

「パリエンコが、テアをお嫁に欲しいって」

「は？」

「そういう話してるのを聞いちゃったんだけど、……大変だよな？」

くるりとやっと顔を巡らしたテアは、テオと同じ顔をしていた。

尤も、その表情は呆れ顔だったが。

性別は男と女と違う筈なのだが、若干12才の二人にはその違いはさほど見られない。否、全くといっていいほど見当たらない。着用している服が、王子然と王女然、それだけである。

顔だけでは区別が全く付かないため、身に付けている衣服で区別されるこの二人。それを知ってか知らずか、意図的に髪型も同じようにしている。尤も、テオは首の後ろで緩やかに一つに纏め、テアは髪飾りをつけてと、服に一応合わせるだけの気遣いをしているが。

「論外。アイツ弱いから」

「……そういう問題？」

隣に同じように腰を降ろすテオ。

「重要だと思うけど？ それに、そんな心配する必要はないと思う。」

この年になっても未だに政略結婚が決まってない時点で、当分の間、どこにも嫁がせる気が父様にはないのは明白

「それはそうだけど」

「大体、テオっていう後継者がしつかりいるんだから、私が国内ってのはナイと思うよ。姉様の事もあるからね」

「そうなんだけど。父様は嫁がせる気がないって言うよりも、遠くへ嫁がせる気がないって感じだと思うけど……。パリエンコの家って、親が親だからさ、わかんないじゃん。家だって近いし。オレやだよ、アレと義兄弟とか」

「私だって嫌。それで？ パリエンコをどうしたいわけ？」

「どうって……別にどうこうってワケじゃないけど、ただ、そういう話を聞いたから」

「テオってそういう話、本当好きだよな」

「好きとか嫌いじゃなくて、耳に入るんだよ」

「私の耳には全く入らないけど」

「とにかく、パリエンコは嫌だ。アイツより、絶対、カシムのがイって」

「……何でそこでカシム？」

「イイ奴だから？」

「カシムは14才も年上で、女ツ垂らしのろくでなし、と専らの評判だけど？ 尤も、仕事は真面目にこなしているし、見た目は女性受けがいいから面倒事押し付けられるし、馬鹿じゃないから余計な説明いらなくて便利だし、腕もいいけどね」

「……テオってさ、姉様達と余り仲良くないよね？」

「仲良くなくはないけど。ただ、……あの人達の話に時々付いていけないだけで」

「女の子なのに」

「興味がないのは仕方ない。それに、どうせそのうち顔が知らなくとも結婚しないといけないような事になるかもしれないんだから、誰が好きとか嫌いとか、見た目が好みとかそうじゃないとか、関係ないと思う。時間の無駄だよ」

「そこを時間の無駄と言っちゃえるのが、テアだよね」

「悪い？」

「全然。僕としては、ずっと一緒にいてくれた方がいいからね」

「テオはさつさとメディと結婚したらいいのに」

「流石にまだ早いと思うんだけど」

「じゃあ進めないでよ、私に」

「……いや、僕は決まってるけど、テアはそうじゃないから。遠くに言ったら嫌だなあと思ってたさ。メディも淋しがるよ」

「かもね。テオが二人いるみたいって喜んでるから」

「……そんな事言ってたの？」

「テオが武芸全般、哀しいくらいに一般人レベルというのを理解してる上で、それでも結婚してくれるって言うてくれる、素敵なコよ。何かあつたら、メディが剣を手にして闘うしかないわね」

「……確かに、苦手だけど。流石にメディよりは」

「正式に婚約してから、剣術習ってるけど？」

「え……」

「カシムの話では筋がとてもイイとか。メデイの母親が、元騎士団所属は伊達じゃないって事かな」

引き攣った顔のまま、テオが硬直した。

「数年のうちに、テオより腕がよくなるとも」

「……冗談、だよな？」

「本当」

「僕、もつと本気でやった方がいいかな」

「それも時間の無駄だと思う。一度も私に勝った事がない時点で」

「……テオが強いだけなんじゃないかと」

「スタート地点は一緒だし、同じように習ってたはずなんだけども？」

「余り興味なかったからなあ……」

「私とテオは中身が逆って、よく言われるけど」

「まあ、確かに」

「それに、メデイにはテオ様を守って下さいねってお願いもされるから」

「え……？」

「剣術習い始めてから前以上に会う機会が増えだし、もしかするとテオより会ってるかもしれない」

「ええええ！？」

「婚約決まって、早々と準備してるみたい。まだ結婚するまで後2年あるけれど、それに向けての色々な話もしてるし」

「い、色々って……？」

「多分、大半が想像通り」

「……メ、メデイはまだボク達と同じで子供だよ!？」

「何を想像したの？」

耳まで真っ赤にして叫んだテオに、厭きれ返った顔を向ける。

「何って、だって……! 想像通りって言ったの、テオだよ？」

「自分の事を子供って言うてるのにそういう想像をするとは思わなかったから。でも、確かに、メデイはもう15才だし。他を見て嫁

いでもおかしくない年齢だからそういう想像をしても仕方ないのかな」

あくまでも淡々としたテアの姿に、不満そうに口を尖らせる。

「結婚云々って話の流れからして、他にどんな想像しろって言うんだよ」

「普通にお茶の話とか、お菓子の話とか。街でどんなモノが流行っているかとか、そんな想像。自分を子供って言う割に、テオは耳年増な上に多感なお年頃だからそういう事に興味を持ってるのかもしれないけれど、流石に12才には早いと思うよ？」

「な、なっ…！」

「それには同意します。お2人ともが、そういう話をするにはまだ早いと思われますよ」

背後から、低い声が響く。苦笑したというよりは、どこか面白げな笑いを含んだ声音だ。

「力、カカカカシム!？」

「テオドル殿下、まずは深呼吸をして、落ち着いて下さい」

「カシム、盗み聞きをする時点でどうかと思うけれど、ずっと黙っていたのだからそのままにしておきなさいよ。テオのノミの心臓が破裂したらどうするの？」

「気付いた時点で止めて下さい、テア様」

「黙ってるから話が終るまで余計な口を挟まないかと思って」

「それは失礼致しました。そろそろお止めしませんと、時間が危うくなつてまいりましたので」

「そう。それで何の用？」

「せめて立ち上がるか、こちらを向いて欲しいのですが」

「どちらにしろカシムより目線が下になるから同じでしょう。それで？」

相変わらず王女然としているのは見た目だけなのかとカシムは苦笑して眼前に回ると、大仰に片膝を付いた。

「テアルージュ殿下、陛下がお呼びです」

「そんな事してもアナタの方が目線は上なのに」

頭を下げたまま告げたカシムに、心底面倒そうにテアは呟いた。

「何の用だつて？」

「仔細は伺っておりますが、少々控えて欲しいと口にされておいででした」

「……父様もこりない人ね」

「そこよりもむしろ、まだ命知らずがいた事を喜んでみては如何ですか？」

「用件わかつてるんじゃない」

呆れた顔をしたテアに、城内外を問わずに女性を虜にしているその顔で微笑んで見せる。

「私に呼びに行くよう仰せつかりましたし、独り言でしょうが控えて欲しいとくれば、想像は付きます」

「他の人を懐柔できてるからといって、私まで懐柔しようとしなくてくれる？」

「殿下はまだ子供ですから、そういった話をするには早いと申し上げたばかりですが」

「そういう注意の前に、国王の娘に手を出す気はないって言わないと駄目でしょうに。他に誰が聞いているかわからないんだから」

「そこは、誤魔化しておいた方が後々便利になりますので、断言せずにおく方がいいんですよ。テア様のおっしゃられるように、誰が聞いているかわかりませんからね」

「いい加減1人に絞つたら？」

「テア様が名乗りを上げてくださるなら、そうしても構いませんが」

「そういう事を言ってるから、節操なしって言われるのよ」

「テア様に対してだけで、他の方に言った事はありません。それに、少なくとも、礼節は弁えているつもりですが」

「それなら、そういう事を口にしないから節操なしって言われてるのね」

「否定出来ませんね」

「交わされる言葉と見た目が全くかみ合わないのだが、2人とも気にする様子は皆無だ。」

「本気なの!？」

「お帰り、テオ」

「テオドール殿下、それは何に對してのお言葉ですか？」

「何って決まってるよ。カシムに聞いたんだよ、本気なのかって」

「ええ、勿論です」

「にこやかな笑顔で断言する姿に、テオがぱちくりと目を瞬く。」

「カシム、内容をきちんと理解していないのに適当に頷くの止めたほうがいいと思うけれど」

「それはそうですが、予想は付きましたので」

「通じてないの!？」

「それなら、後はお2人でどうぞ。どこに行けばいいのかしら？」

「絶叫したテオに對し、淡々とした口調でテアは話を戻した。」

「執務室です」

「そう、それは愉しみね」

「それが偽りでない楽しいげな笑みを浮かべてテアは立ち上がる。」

「テオ、カシムの口から出任せを本気にしたら駄目よ。カシムは嘘は付かないけれど、クリオと違って本心も口にしないんだから」

「人見知りが激しくて警戒心も強い割に、1度信頼するとありえないくらい信じやすくなる上に、元々人が良いのも手伝って非常に騙されやすい からかわれやすい 双子の兄に、お決まりの注意を口にする。尤も、すでに何度目かわからない対カシムへの注意事項なのだが。」

「クリオはカシムみたいに色々な話しないよ。テアはもう少し、自分の立場をありがたく思うべきだよ。近衛がカシムでさ。話だって楽しいし、色々な事知ってるし、腕だつて強いし」

「腕ならクリオの方が上、経験もね。雑談が好きなら好きなだけ話せばいいし、そこまでいうなら変えてもらったら?」

「それは駄目！ カシムはテアのなんだから！！」

「別に私の所有物じゃないんだけれど、ただの近衛騎士で」

力いっぱい断言するテオに、その姿を厭きれ返ったようにテアは見下ろした。

「テアはわかってない！」

「わかってないのは、テオでしょう。何度カシムに騙されたら懲りるの？」

「騙されてないよ！！」

「私も騙した覚えはありませんが、このくらいにしておきましょう。テア様、陛下をこれ以上お待たせする訳にはいきませんので」

「わかってる。テオ、悪いけど続きは後でいい？ もしくは一緒に来てくれても構わないけれど」

「え…？ だって呼ばれてるのテアでしょ？」

「多分、テオの言ってたパリエンコの件だと思うから」

「ええええええええええ！！？」

「私も殿下のお話を聞いて同じ意見ですね、テア様」

「ええええええええええ！！？ って、カシム、いつから聞いてたの！？」

「殿下が、テア様の隣に腰を降ろされた辺りから」

「思いつきり初めからいたんだね…」

脱力して呟いた未来の国王たる王子に、人懐っこいと評判の笑みをカシムは浮かべた。

「失礼とは思いましたが、ここ半年、お2人とも忙しく、それまでに比べて余り一緒にいられる時間を取られておりませんでしたので、邪魔をするのは気が引けましたから」

「………だったら終るまで待っててくれたらよかったのに」

「長くかかりそうでしたし、話題がお2人にはまだ早いと判断したので止めました」

にこにこ告げるカシムに、拗ねたように口を尖らせてテオは立ち上がる。

「ボクも行く！ 父様に、反対だって言いに！！」

拳を握り締めて断言したテオに、何故かテアとカシムは揃って曖昧な笑みを浮かべた。

その日の夕方、城内に絶叫にも似た泣き声がかたました。

事情をよく知る者は大きな溜め息を吐き出したただだが、知らない者は天変地異の前触れかと大慌てを展開した。

「テア。もう少し穏便に事を運べないものかね？」

国王執務室の外れで向かい合うソファに重い腰を下ろしながら、変わった様子の1つもない末娘を見つめる。

「お言葉を返すようですが、父様。今回、私は何もしておりません」

「何もしてないなら、何故、パリエンコが泣きながら城を飛び出していったのか、理由を知りたいものだが」

「お会いしてすぐに3年後に結婚しようと言われたので、私は自分より弱い人と結婚する気はないと答えました。それなら自分はいからしっかり鍛錬するとおっしゃられたので、頑張つて下さいと伝え、勉強が残っているからと退席させて頂きました。それだけです」

「……………それで泣きながら城を飛び出すかね？」

「父様。私が直接関わったのは、それだけです。彼が泣いて走り去った原因の詳細を、事細かに、お知りになりたいのですか？」

静かに紅茶を飲みながらの遠まわしな言い方に、父王の背には物凄く悪寒が走る。

「今後のために、是非とも、聞いておいた方が良さそうだが……」

「恐らく、父様は知らない方が長生きできると思います」

「淡々とテアはその内容が性懲りも無いものだと言暗に告げる。

「テア。嫌なら嫌と、私が話をした時点で言つて欲しいのだが？」

「聞き入れて下さるのでしたら、言いますけれど」

「ザンダー、マイロ、ケヒサール、ストリツヒ、彼等の何処が気に

入らなかったのか聞いてもいいかな？」

「今更ですね、父様。ザンダー様は、開口一番に稚児趣味はないから10年後を楽しみにそれまで会わずにいたいとおっしゃられました。マイロ様は、早速結婚式の話を始められました。ケヒサル様は、下を向いたまま沈黙されて私が話しかけても返答すらありませんでした。ストリツヒ様は……父様、彼も気が早まっただけです。怒らないで聞いて下さい」

「……何で1人だけ注意事項が入る？」

「押し倒されました」

「何にいいいい!？」

国王とは思えない変なポーズで固まった父王を気にした様子もなく、

「なので、腹部を殴り急所を思いっきり蹴り上げて差し上げました」

結果だけを告げてテアは紅茶を口に含んだ。

「父様、もう少し、まともな人を選別して下さい。幾ら将来有望だろうと、人間関係を構築できない時点で、終わつてると思います」

「ス、ストリツヒは、打ち首に……っ!!」

「父様、落ち着いて下さい。あの当時、彼は15才、多感な年齢だったのですから仕方ないでしょう。そういつたことに興味を持つている年齢ですし、恐らく、父様が認めて話が進んだのならもう決まったようなものと思ひ込んだのです。とはいえ私はまだ11になつたばかりでしたので、そういった対処をさせていただきましたが」「し、しかしっ!!」

「それに彼は現在、婚約中ではありませんか。もう過去の話です。他の方も含めまして」

「……テア、そんな目にあつたから、嫌なのかね? もう男なんかこりごりだと? 結婚したくなくなったのか? それとも、やはり、私が嫌いなのかつ!？」

涙目で叫んだ情けない父王は、テアが言ったように、テアを遠方

へ嫁がせるつもりが全くない。そのため有能な部下の息子を幾人も選別していたりしたのだが、今ではテアへの結婚話は国王から口を開かれた時点で部下が青褪めた顔で必死に断るという前代未聞の事態が発生していた。何しろ、理由をこじつけてあわせるたびに、テアよりずっと年上だろうと騎士として将来有望であるうと、悉く泣いて帰るといふ謎な事態が発生しているからだ。酷い者など、ノイローゼになって以後家から1歩も出なくなったりもする。勿論、恥を晒すようでおおっぴらに話される事はなかったが、密やかに語られる中で、父親達は息子をそんな目にあわせるものと必死なのである。王族との近親関係を結ぶ事は願っても無い事だろうが、再起不能になる可能性が高いカケをしたくもないだろう。

尤も、何も知らない者や、夕力をくくった者が今でも時折被害にあっているが。

補足すると、テオはそれらを全く知らず、テアには未だにそういった話は皆無だと思ひ込んでいる。

必死としか言いようのない姿に、テアはにつこりと可愛らしく微笑んだ。

「父様の事は大好きです。ですから、私は、まだここにいたいのです。一生ここに居る事は敵わなくとも、出来る限り、私は父様の傍にいたいのです。そう思うのはいけない事ですか？」

伏せ目がちに淋しそうな声音で呟いたテアに、父王は首が飛ぶんじやないかってくらい勢いで左右に振りまくった。

「そ、そんな事はない！ 私だって出来たら、むしろ一生ここにいて欲しいと思っている。しかし、やはり……私の娘である以前に、テア、お前は1人の女性なのだ。女性として幸せになって欲しいとも、思っている」

「正直申し上げて、私はまだまだ子供ですので、そういった事はわかりかねます」

口調も表情も万人への態度も、全然子供のそれではないのだが。

「……テア、本当にわからないのかね？ その……何だ。実は、気

になる男性がいるが、王女という立場と姉の事を気にして、黙っているだけという事はないのかね？」

沈痛な面持ちになった父王にテアは苦笑を返した。

「本当にわからないのです、父様。そういった意味で、私は、リネア姉様を羨ましく思いますし、尊敬しています。その身にかかる重圧も、責任すらも超えて1人の方への想いを貫き、何不自由なく王城という特殊な環境で育ったにも関わらず、一市民として、街に下りたのですから。私にはそこまでの強い想いというのは、未だ理解できません」

「そうか……」

「それに父様。私にそういった方がいらっしやるように見えますか？」

「……見えんな」

「それでしよう？」

「恋文を添削して返すのは、多分、テアくらいだ」

「あれは、私より5才も年が上の割に文章も満足にかけていない事に、将来、領主となられる立場を思っただけで心配になったからです」

「今、必死に勉強しているらしいが」

「遅すぎです」

ずっぱりときり捨てた愛娘に、父王は心から微笑む。

「テアは、相変わらず本に夢中か」

「はい」

和やかな声で呟くようにいった言葉に、テアは満面の笑みで頷いた。

そろって紅茶を飲み、和やかな雰囲気の中静かな時間が流れる。

「それで、父様」

「何かね？」

「パリエンコ様の件ですが、お知りになりますか？ 私も聞いた話になりますか？」

穏やかだった父王の表情が果てしなく強張った。

「よ、要点だけを教えてもらおうか」

「はい」

頷いて、テアはカップをソーサーに戻すと真っ直ぐに父王を見据える。

「人違いに気付かず、テオに延々愛の言葉を囁く事半刻余り。その果てに抱きついて初めて私でない事に気付いて、シヨックで叫び、その後泣きながら走り去ったそうです」

父王が固まった。

「私とテオの区別も付かないような方と、流石に私も結婚する気にはなれません」

「……ちよ、ちよっと、待て。テア。流石に、服装でわかると思うのだが？ というか、勉強があるからと退席したのだろうか？ それなのに何故、パリエンコがお前の傍で愛の言葉を囁けたり出来るのか、不思議なのだが」

「テオが私のふりをして会いにいったからです」

父王の顔色が青くなりました。

「勿論、ドレスをきていた訳ではありません。服装は軽装でしたが、スカートでもなく、ただ、髪を降ろしていただけだそうです。言葉を交わしたにも関わらず、それだけでパリエンコ様は、テオを私と思い込まれたようですね」

「………テオは、何を考えておる」

「昼間、父様に宣言されたように、パリエンコ様と義兄弟になるのは嫌だからでしょう。カシムの話では、自分とテアの区別が付かないようなヤツにテアはやらないと宣言したそうです。その後、泣いて走り去ったと」

「……カシムまで？」

「私の近衛ですから」

「テオに貸したのか？」

「いえ、テオがカシムと話たいと言いましたから。カシムも私が机に向かっている間は、暇だろうから構わないと思って。結果、そう

いった事になっていたようですが」

「最近、入れ替わるいたずらが減ったと思っていたが、ここでやるとは……」

力なく呟き、父王は頭を抱え込んだ。

「でも、父様。テオの言い分は尤もですよ。間に鏡があるかのよう
に寸部違わぬ装いでも、私とテオの区別が付くような方でないと、
私も嫌ですから」

「……私と、リネア、ネス、マシユリー以外に、誰がいる？」

呻くように2人の姉と乳母の名前を連ねたその表情は苦悩と落胆
の色。王という立場にいる以上、例え戦時中でも、政務に苦闘して
いる時でも、ここまで精神的に追い込まれた顔はしない。

「今は無理でも、性別が違いますから。大人になれば、きっと違い
が出ると思いますよ」

にこにこ微笑んで告げるテアの姿に、父王は再び頭を抱えた。
それまで嫁ぐ気はサラサラ無いのだから結婚話を持ってくるな、
と解釈したからだろう。

王様にとって、子供は最大の自慢。

中でも1番の自慢は末の双子の王子と王女であったが、同時に、
1番の苦悩の種でもありました。

王子と王女と近衛騎士

ある国に、双子の王子様と王女様がありました。

王様が自慢する子供達の中でも、瓜二つではつと見全く区別の付かない双子の王子と王女は、近年、その成長が一番の楽しみだと周囲にニヤケた顔で語るほどでした。

けれどもこの双子、誰にも言えないが、王様にとって悩みの種でもあったのです。

テオドルル「カリオトルルーエン。

正式名称はもっと長いのだが、一般に流布しているのはこの名だ。

12才になる、この国の第一王位継承権を持つ王子である。

強情なまでに真っ直ぐな黒髪と、青緑色の不思議な色合いの瞳、抜けるように白い雪肌、嫌味なくらいに愛らしく整った顔立ち、同年代の者達と比べても全体的に小柄で細身の体躯。

どこをどう見ても、彼は立派な、
美少女だった。

「テオドルル様、本日午後の予定ですが」

「わかってるよ、クリオ。騎士団へ行つて、激励でしょ？」

「はい」

「……そういうのって、武芸全般全くダメなボクが行っても仕方ないと思うんだけど。それともアレかな、ボクのダメっぷりを見本にして、しっかり日々精進しないと、将来この国が危機に晒された時にあっけなく終わりを告げるよって言いたいのかな？」

「殿下。騎士団は、剣にして盾。この国、引いては陛下や殿下をお守りするためにいるのです。将来、陛下の後を継ぎ国王となられる

殿下に尤も望まれるのは、国を治める能力です。武力は最優先事項ではありません」

「でも全くナイってのは問題だと思うよ」

「そう思われるのでしたら、尚一層の精進を心がけてくださいますように」

「とか言うんだよ、こーんなしかめっつらで」

「事実だから仕方ないでしょう」

手元の本から目を逸らす事なく、あっさりとしてアアが呟いた。

「テオに求められているのは、そんな事よりも政治の手腕でしょう？ 国の政の采配をきちんと触れるかどうか、そこが1番の問題だし、それが上手く行ったら武力なんていらなないんだから」

「全然心配ないなら、ボクだって気にしないよ」

「現状、特に問題ないでしょう？」

「問題ないなら、何で、今までに2度、凄く大切な場面で入れ替わってたのかな、テオと」

「テオの命狙ってる人達が賓客で来てるから」

「それだと、テアが危険になるよ」

「私の命は狙ってないから」

「何でさ。この国落としたいなら、テオだって狙う対象だよな？」

「落としたい訳じゃなくて、手に入れたいだけ。戦争起こして疲弊したモノを手中にするよりも、1番簡単で、1番手早い方法で乗っ取るため」

「……わかんないし」

「テオが死んだら、王家に残るの私だけになるから、そうすると私と結婚した人が次の国王になるからね。それを狙ってる」

「なるほど。それなら、テアには生きててもらわないとダメだよな」

「私が姉様達みたいに王家から外に嫁いでるなら、方法も変わると

思っければね」

「……テア、まだ結婚しないよね？」

「して欲しいの？」

「ボクの命を守るためにテアが結婚するっていうのは、嫌だから」

「私がテアの命を守るために人生かけたりする訳ないじゃない。尤も、戦争になって城が落ちるとか危険になったら、指して役に立たないとしても、テオの前に立つくらいはするけれど」

「……ボクって情けないね。テアに守られないとならないなんて」

「そういう事態を招かないために、国政、内政も外政もしっかり締めておかないといけないのよ」

「思っただけど」

「うん？」

「ボクよりも、テアの方が国王に向いてない？」

「それはない」

あつさりと否定して、ちらりとテアは顔を上げる。むしろやっただが。

「テオは自覚が本当にないから、そう感じるのかもしれないけれど。私が父様の後を継いで王位に付いたら、10年経たずにこの国は沈むよ」

「まさか、幾らなんでもそれは言い過ぎだよ。だってテア、学問だって武術だって、何だかって上手くこなすじゃない」

「それは別に国王の条件じゃないし、民を統べる王たる資格に必要なモノが幾つも欠けてるから」

「何？」

「強いて言うなら、平等性」

「何それ？」

「誰に対しても、変わらぬ平等な態度で接し、私利私欲関係なく平等な判断が下せる事」

「完璧だよ、テア」

「私みたいに命通ってないような淡々としてて、大丈夫だと思って

るの？」

「……そっか。確かに、知らない人にテアは結構誤解されやすかったね」

「それにカリスマ性。私的な意見だけど、民を扇ど……先導するっていう意味でかなり必要だと思う。テアはこれが完璧。何をやらかしても、嫌われる事ってないから」

「そっかなあ？ でもそれって、王子だからって理由じゃない？」

「私は違うから、王子っていう立場は関係ないと思うよ」

「テア、嫌われてるの？」

「それなりに。別にそういう人達がどうしようも気にしてないけど」

「そこを気にしてないと言い切れるのは、テアだけだよ」

「だから、私に国王は無理。誰に何言われても、どう思われても、自分が気に入ってる人だけこっち向いてくれるならいいと思ってるから」

「……凄く説得力があるよ、テア」

「テア様。ご自覚されているのなら、少しは身近な者以外にも優しい言葉をかけてあげて下さい。それと、身近にいるにも関わらず、唯一冷たくあしらわれている私にも」

「力、カッカカカシム！？」

「テオドル殿下、深呼吸をして、落ち着いて下さい」

「カシム、それ、わざとやってるの？」

「滅相もございません。たまたまです」

「いつも狙ったかのようなタイミングで出てくる気がするけれど」「時間ギリギリまで、見過ごしているからそのように感じられるだけでしょう」

「しかも、さり気なく待遇向上要求を口にしてるわね。十分、優しくしてると思っただけれど？」

「聞き流されたかと思いましたが、テア様。止めて下さり感謝致しますが、現状で、ですか？」

「ええ、勿論。それで、何の用？」

「タリーへの態度と比べるとかなりの温度差を感じるのですが、私の気のせいなのですね。失礼致しました。用件は、廊下にクリオ殿がいらっしゃっておりました。殿下をお待ちのようですが」

「随分前からいるみたいない方ね」

「私が先ほど失礼させて頂いた時に、扉の前ですれ違いまして、戻りました所、変わらず同じ場所に立っておられましたから」

「遠まわしな言い方をせずに、テオが来た時からずっといると言えばいいじゃない。それにしてもクリオには本当に、感心するわね。

誰かさんにも爪の垢でも煎じて呑んで欲しいわ」

「麗しき女性のものでしたら喜んで呑みますが、クリオ殿のは勘弁して欲しいですね」

「誰もカシムには言っていないわよ」

「そう聞こえましたから」

「流石に私の直属になって8年を超えるだけあって、言わなくても通じてくれたのは嬉しいけれど」

「光荣至極」

「褒めてないわよ」

「存じております。しかし、テア様が、直接言わずとも話が通じると認めて下さったのが嬉しかったものですから」

「相変わらず、そんな事を言い回っているの？」

「テア様にしか申し上げませんが、他の方と言葉もなく意思疎通が図れたとしても嬉しくありませんが」

「女性を口説く時は言葉はいらないとか言っただけかしら？」

「ええ、そうですね。相手の方が最初から口説かれにいらっしゃってありますから。とはいえテア様、こういった話題はまだお早いと思われませんが」

「そう思つのなら、アナタ自身の態度を少し改めてほしいものだけねど？」

「テア様の目に付く所は避けているつもりですが」

「注意したのに続けていたら、その場で首にしていると思うけれど。それで、今頃それを言いに来たのはどうして？」

「はい。殿下がそろそろお時間なので、向かわれた方が宜しいかと」

「もうそんな時間なの？」

「はい、もう数分もすれば、クリオ殿が直接いらつしやるかと」

「そう。テオ、もう行かないといけないみたいよ？」

くるりと顔を巡らすと、ぽかんと口を開けたままでテオを見つめている。

「テオ？」

「……………いつも思っただけど。カシムって、テオが好きなの？」

「勿論です、殿下。テア様は、私にとってこの世界で1番大切な方です」

「晴れやかな笑みで頷く。

「やっぱり！ ねえ、それってさ…」

「テオ。カシムがそんな事を言ってるのは、私がいなくなったら職ナシになるから。父親が内政で重役に付いているとはいえ、同じ仕事をするのも無理だから、この年で無職なんて洒落にもならないもの」

何故か頬を染めてもじもじするテオに、呆れ顔でテアが言う。

「強ち否定出来ませんね」

「ええ！？」

「驚いてないで。クリオが待ってるらしいから行った方がいいよ」

「えー…………」

「テオ」

じと目で呟くテアに、本気で渋々といった顔でテオは立ち上がる。

「でもカシムなら、騎士団でも十分やっていけると思っつよ？」

「団体行動は無理、カシムには。そもそも…」

「クリオ」

溜息がちに呟いて顔を上げたテアの視界に丁寧な一礼をしてから歩み寄る姿が映り、その口から出た名前に、むう、とテオが振り返った。

「テオドル様、お時間です」

敬礼し、かつちりとした真面目腐った口調でお決まりの科白を口にする。

「わかったよ」

「クリオ。迷惑かけると思うけれど、テオをお願いします」

さっと立ち上がったテオが苦笑して告げてからぺこりと頭を下げた。

その行動にしぶしぶ立ち上がるうとしていたテオはぶーっと口を膨らませ、カシムはがっくりと肩を落とす。

「はい。　　しかしながら、テアルージュ殿下。テオドル様の

事で私が迷惑に思う事など一つとしてありません」

「武術全般が全滅でも？」

「はい」

苦笑いのテオに対して、クリオは真顔でしつかりと頷く。

「それに関してはテアルージュ殿下もご承知と思いますが、あえて申し上げるとするならば、将来、国王となられる御身であれば、テオドル様にとって武力は最優先事項ではありません。王としての資質、尤も必要とされる能力を、テオドル様は備えていらっしやるように見えます。後はそれを伸ばし、良き国王となれるよう様々な事を学び、経験を積む事こそが重要であると考えます。そして、武力を最優先で必要とされるのは、この国を守る盾であり剣でもある、我々騎士団の方なのです」

「完璧な回答ね」

生真面目に断言する姿に、半分驚いて半分苦笑してテオは呟いた。

「かたつくるしんだよ、クリオは」

「国の顔になる予定のテオの傍にずーっといるんだから、かつちり

してないとダメでしょうに。そんな所で、外交相手や腹黒いお歴々相手に弱味見せるような状態じゃ問題あるんだから」

当然の事だしそんなのテオだってわかってはいるのだが、やはり不機嫌そうに頬を膨らませる。

「テオ、そんな顔しないの」

苦笑したテオに、表情を戻すことなくクリオに向き直るとテオは唇を尖らせた。

「クリオってボクよりテオに付いた方がよかつたな〜とか思うでしょ？」

「は…？」

物凄く珍しい、クリオの間の抜けた声が上がった。

「騎士団の元副団長としては、幾ら王位継承権第一位とはいえ傍に仕えるのが武芸へっぽこのボクじゃ格好つかないし。視察に行くのだって気まずいんじゃないかって思うんだよ。ボク付きにならなかつたら将来は団長を有望視されてたって聞いたしさあ」

うじうじ続くテオの科白にクリオは茫然としているだけだ。

何がそんなにショックだったのか、ポーカーフェイスを決めて滅多に感情を出さないクリオがほうけた顔で目を瞬いている。

「……クリオが珍しい顔してる」

「他の人間に同じ事を言われても平然としてるだろうが、相手がテオドール殿下だからか？」

ツツコミを入れるも蚊帳の外になりさがった2人。

「だから、ボクよりテオの方がよかつたなあって思ってるんじゃないかって…」

「クリオ？」

一頻りマイナスを言い切った後に最初の科白を繰り返したテオの眼前で、クリオが勢いよく片膝を付いて頭を深く深く垂れた。

「申し訳ございません！」

普段よりも音量が上がっている。

第一声が謝罪の言葉だったので、本当にそう思ったことがあるのかと思つた男2人に苦笑いを浮かべる女1人。

「テオドル様にそのように感じさせてしまった事、そのようなお考えを抱かせてしまった事、私の不徳の致すところ。日々の私の態度にも至らぬ点もあったゆえそう思われたのだと、まことに申し訳ございません」

土下座ではないが心象的にはそんな感じに、切羽詰った大声だった。

ああなるほど、とカシムが小声で呟く。

「え？ え？ えーっと。どーゆこと？」

上手く理解できないテオに、仕方ないとばかりにテアが肩で小さな息を付く。

「テオ。クリオは、今テオが口にしたような事は全然思っていない。むしろ、そんな考えをさせちゃった事を謝ってるのよ」

「え？ でも…」

「それに、びっくりなのが騎士団の団長とテオの近衛で、団長の方が良いと思ってるところ」

「だってそれって団長だよ？ 騎士団のトップだよ？ 凄いんだよ、騎士の誉れだよ！！」

力いっぱい真顔で叫んだテオに、物凄く失礼な話だがカシムがぶつと吹き出したので、テアが表情も姿勢も崩す事なく自然な動作で背後に立つカシムの足の甲めがけて己の左足のかかとを踏み降ろした。

「っあ！？」

呻き声を小さく漏らして悶絶するのを何とか堪え様とするカシム。

子供といえどヒールくらい履く、高さは低いがそれでも痛い。ピンヒールは凶器だ。

「騎士団の団長と、国王の近衛と、どっちの方が良いかはわかるわよね？」

何事もなかったかのように背後の喧騒をシカトして続けるテアは心なしか諭すような声音だ。

「そんなの国王付きに決まってるじゃん。そりゃ、騎士団を始めとする軍事関係の話に直接口は出せないだろうけど、国王直属の独立した組織だから騎士団から命令受ける事もないし、国王の伝令役する時もあるし、特殊な事態には騎士団へ国王の代理で命令も出せるし」

「そこまでわかってて、何でクリオの事はそう思ったの？」

「何が？」

「団長の方がいいとか、私の方がいいとか」

「だってボク、武芸全滅だよ？ 周りにいい条件山ほどありすぎだし」

ぐつと拳を握り締めて真顔になり、

「クリオはボクに勿体無いと思うんだ」

そう締めくくった。これ以上ないくらい真剣な表情と声で。

カシムは危うく声を出しそうになったのを慌てて塞いだ。蹲っているのが痛みを耐えているように見えるが、震える肩は笑いをこらえているに他ならない。

「テオ」

溜息がちに名を呼ぶ。

「何？」

「これからする話をよく聞いて」

「うん？」

テオが頷いたのを受けて、今なお頭を垂れたままのクリオを眺める。

「クリオ、もう頭を上げて。多分、私が何を言ってもわからないと思うからアナタから直接言って欲しいの。自分がどうしてテオの近衛になったのかを。勿論、声がかかったからというのものもあるでしょうけれど、私が言ってるのはそういう意味じゃないわ」

テオの言葉に本当にゆっくりとクリオは頭を上げた。

真っ直ぐに、ほぼ同じ目線の高さになる己の主を見つめる。不安がその瞳いっぱい広がってはいるが、幼いながらも強い光を秘め

ている、将来この国の頂点に立つ少年。

「私がテオドル様にお仕えする事になったのは6年前、後継者の第一位として公式に宣言が出る事になったからです」

「そうだね、覚えてるよ」

「あの時、テオドル様は私に初めましてと挨拶して下さいました」

「うん」

「確かに、正式に体面したのはあの時が初めてですが」

「クリオまどこころこしい」

真面目に語るクリオに、不真面目な男がツツコンだ。

「カシム」

クリオは苦笑したように、テアは不機嫌そうに、その名を口にす
る。

「単刀直入に言え。でないと、遅刻する」

最後に付け加えられた科白に、カシムを除く全員がハタとした。
どうやら綺麗さっぱり忘れていたらしい。

クリオが予定を忘れるなど珍しいのだが、それだけテオの発言が
精神的にダメージが大きかったのだろう。

「テオドル様。私は初めてアナタにお会いする半年ほど前に、そ
のお姿を拝見した事があります。場所は、城の東にある薬草園です。
覚えていらっしやいますか？ テオドル様は、熱を出した侍女の
ための薬をご自身の手で摘みにいらっしやっていました」

「……え、な、何でクリオが」

「遠方へ任務に出かける前で、持参する薬の補充のため薬師を尋ね
ていたのです」

「そ、そうなんだ。でも、それがどうかしたの？」

「侍女の体調を心配し自ら薬を手に入れるために動いたその姿が、
とても新鮮に思えました。その立場を思えば、気にかけてこそすれそ
こまで心配しなかったり、人を動かして取ってこさせる事もできた
でしょう。しかしテオドル様、アナタは幼い身の上でありながら

それをせず、自ら動かれていた」

「そ、そんなの自分の身近な人が寝込んでしまったんだから当然だよ」

「今はテオドル様の人となりを知っていますので領けませんが、当時の私は本当に驚いたのです。薬師達から話を聞いて、更にそれは強まりました。だから私は、その時に、決めたのです。アナタに私の剣を預け様と」

「え…。そんな事で？」

今度はテオが呆ける。

「はい。テオドル様、私は、アナタに仕えられている事を誇りに思っています」

真面目なポーカークフェイスが少しだけ優しい笑みを浮かべ、呆けていたテオの顔が崩れたかと思うとみるみるうちに赤くなった。

「茹だつお!？」

余計な事を口走ったカシムが2度めの制裁を受ける。

「テオ、照れてる場合じゃないわ」

「べ、べ別に照れてなんかっ…」

「その顔で否定されても説得力皆無でしょう。仲直りしたんだから、揃って騎士団へ行つてらっしゃい」

「そっ、そーだね。行こう、クリオ」

「はい」

色々誤魔化したいのに誤魔化せないテオはそそくさとその場を後にしようとし、短く返事をしたクリオはテアに一礼してからその後を追った。

「誤魔化せる程度の遅刻で済めばいいけれど」

その背を見送って、テアは溜息を1つ。

「カシム、本当に爪の垢でも煎じて飲んでみる？」

足元で蹲る大の大人を見下ろした。

「…ご、ご勘弁を。というか、テア様、痛いんですが」

「自業自得でしょう。それにもっと高いヒールで踏まれ慣れてるん

だから、この低さなんて問題じゃないでしょう」

「テア様、私、女性にヒールで踏まれる趣味はありませ…

っ」

氷のように冷たいテアの眼差しに、流石のカシムも言葉を飲み込んだ。

王様にとって、子供は最大の自慢。

中でも1番の自慢は末の双子の王子と王女であったが、同時に、1番の苦悩の種でもありました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8893s/>

王子と王女

2011年5月6日23時10分発行